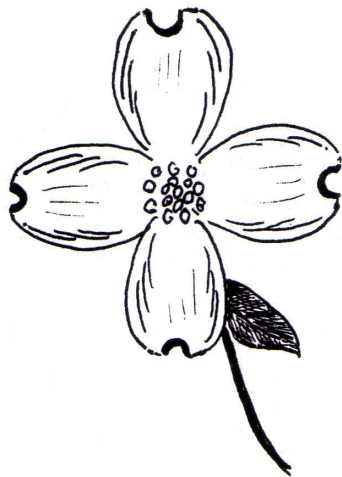


ハナミズキの由来

白倉昇進



花水木の由来 (白倉昇進 1976) p.2~7
再版にあたって (前島毅 2009) p.8~9
付記 (植松従爾主教 2009) p.10
ハナミズキの苗作りについて (前島毅) p.11~12
ハナミズキの由来 年表 (前島毅) p.12~16

花水木の由来

長坂聖マリヤ教会の庭には五十本近い花水木があって、毎年五月になると、白、淡紅、濃紅などの花を枝いっぱいにつけて大変綺麗です。花だけでなく秋にみせるまっかな紅葉もまたとても素敵です。

「花水木」という和名は、「美しい花をつけるみづき」という意味ですが、「アメリカヤマボウシ」という別名からもうかがえるように、もともとこれはアメリカの原産です。米国東南部の諸州に特に多く、アメリカでは日本の桜のように最も一般的な樹木として多くの人達に愛されております。バージニア州、ペンシルバニア州の州花、またアトランタ市の市花にもなっており、学名は「フロリダのみづき」(Cornus Florida)と命名されています。英語では「Dogwood」(ドッグウッド)…つまり「犬の木」という大変無粋な名前ですが、これはこの木の皮の煎汁で、むかし犬の病気をなおしたことからつけられた名前だそうです。公害にも大変丈夫で適応性も強く、ひどく乾燥しなければどこでも育ち、花が美しく、しかもなが持ちするというので、最近排気ガスのために一般の樹がひどく害をうけているのに対し、この花水木の存在が急に目立ってきました。

さてこの花水木ですが、これにかかわる大変感動的な「いいつたえ」をご紹介します。

イエス様が十字架につけられた時代には、ドッグウッドの樹は樫の木のように大きかったそうです。この木は非常に堅く丈夫であったので刑罰用の十字架の材料として用いられておりました。このような残酷な目的に使われてきたのでドッグウッドは大変みじめな気持ちになっていました。

この木でつくられた十字架にかけられたイエス様はドッグウッドの気持ちを察せられ、その悲しみと苦悩に対して、やさしく憐れみの御心を注がれて、「我が十字架上の苦しみに対する汝の悲しみと心の痛みの故に、今後、ドッグウッドは十字架に使われるほど大きな樹には決して成長しないだろう」と言われました。それ以後、この木はそれ程の大木にはならず、現在のような楚々たる灌木になりました。然しその花は十字架の形をあざやかに示し、四枚の花弁の外側の真ん中には釘跡のしるしがあり、血潮をあらわす赤い斑点がその釘あとのまわりについています。しかも四枚の花びらが十字型に交わる花の真中には、イエス様の茨いばらの冠かんむりがくっきりとでています。

このように花水木は花咲くたびにイエス様の十字架をしのばせ、この花をみる人の心に主イエスの十字架の奥義を想いおこさせるのであります。

長坂聖マリヤ教会の境内にある花水木は、一九六三年（昭和三十八年）清里農学校の開講を記念して、米国の北カロライナ州、トライオン（Tryon）に住むサラ・ダーナル夫人の御骨折りによって同地のガーデンクラブ庭園協会から清里農村センター（キープ）に寄贈されたものの一部です。清里農学校ではこの花水木の花が校章になっております。なお十字架の形をつくっている美しい花びらは実は花びらではなくて総苞であって、花の真中にかたまってイエス様の冠を形造っているのが本当の花だそうです。

昭和四十九年の十一月三日、私は四人の孫を引き連れて長坂聖マリヤ教会にまいりました。植松司祭様の御案内で、宝石のように美しく輝く真っ赤な実を採取致しましたが、孫たちも日頃憶えている聖歌を口ずさみながら一生懸命手伝ってくれました。みんなで夢中になっているうちつい時間のたつのも忘れ、司祭様に車で家まで送っていただいたあときの嬉しくて楽しかった思い出がいつになっても強く印象に残っております。

さてその翌日は種子の水洗いを孫たちに手伝ってもらって致しましたが、冷たい冷たい水のなか、手を真っ赤にして協力してくれた孫達に、おぢいさんは感謝の仕様がありません。まる一日かかって選別しましたが二万二千粒ほどありました。一週間ほど日乾ひぼして種子の貯蔵をし、翌昭和五十年三月十五日、水田の一部を利用して播種もおわり、約二十日

ぐらいで発芽致しました。それからが毎日、除草その他の管理にいそがしい毎日でしたが、実生の苗をつくりだすのは大変むづかしいといわれてきた「アメリカ花水木」の苗木が一日一日と成長してゆくのをみると、すべての苦勞がすつとんでしまうほど嬉しいものでした。司祭様も毎週土曜学校にこられるたびに一緒に苗圃をまわって、喜んで下さいました。秋になり背丈もまだそんなに大きくは伸びていないにも抱らず一人前に美しく紅葉している花水木をながめると嫁入り前の娘をみるような、胸のつまる、じんとする思いが致しました。一メートル位まで伸びましたが花咲く春をまつのがなかなか容易ではありません。二、三年後がたのしみです（昭和五十一年現在）。

明治の末期、当時東京市長であった尾崎行雄（峯堂）翁が日米親善のしるしとして桜をアメリカに贈り、これが現在ワシントン市のポトマック河畔の桜の名所となっていることはよく知られておりますが、このときアメリカからの答礼として贈られてきたのが、バージニア州の州花「花水木」だったのです。ところが大変残念なことには、贈られた東京市では花水木を大事にしなかったのか、或は育て方がまずかったのかもしれませんが、せつかくの苗木もどこかに消えてしまい、東京日比谷公園にすこしだけ残っているというのが現状なのです。尾崎翁とは同郷の川崎秀二前自民党代議士がこの事実を知り、これは米国の厚意に対して大変申し訳ないことと考え、有志とはかり「花水木を育てる会」をつくり、米国の関係者に改めて花水木の寄贈をお願い致しましたが、このお

願いが実を結び、現在、憲政記念館庭園に二五〇本の苗木が移植されているのをはじめとして国会議事堂の周辺、皇居の一部などに植えられ花咲く春を待っております。

山梨県でも大月市の御太刀や河口湖畔などに、美しい花水木の並木が生まれようとしております。

コブシのような大柄な花、秋になって美しく輝く真赤な実、そして色鮮やかな紅葉、最近では庭木としても珍重され花水木ブームがおこっているようですが、三年前、教会の庭で孫たちと真赤な実まっかを採ったことを思い出しながら私はこんな歌を作りました。

「花よし実よし 紅葉よし

四季を通じて花水木」

花水木にまつわる「イエス様の十字架」の伝説について、信州の志村きよ様がよせて下さった短歌を掲げて「花水木由来記」の結びといたします。

憐れみは灌木となり楚々と咲く

十字の花に釘跡のこし

釘あとの血潮あらわす斑点の

消ゆることなき贖罪の花

十字形交わる苞にかこまれて

花芯よかなし茨の冠

「はなみずき」君贖罪のお伽花

また来ん春は十字に咲かむ

昭和五十一年十月二十日

白倉 昇進

(昭和五十六年二月三日永眠)

「ハナミズキの由来」再版に当たって

主イエス様の十字架を思い起こさせてくれる慈しみ溢れる感動的な言い伝えを持つ「ハナミズキ」の苗が、長坂聖マリヤ教会の庭に植えられてから早四六年が経ちました。そして、そのハナミズキをこよなく愛し育成に尽力された白倉昇進さん（一九八一年逝去）が、一九七六年に植松従爾主教|当時司祭|のご指導の下で「花水木の由来」という小冊子を出してから三三年の歳月を数えました。子供たちは大きくなり私どもは老齢となり、長坂聖マリヤ教会のハナミズキの歴史を識る人も語る人も次第に少なくなりました。

奇しくもこの度、長坂聖マリヤ教会の教会報が「ハナミズキ」と名付けられたのを機に「花水木の由来」の再版を思い立ち、それに新たに「年表」を添えて発行することにしました。この「年表」は当初を知る植松従爾主教、植松喜久江先生、武藤六治主教、高田眞司祭にも照会して、より正確なものになるよう心掛けました。

教会のハナミズキは私ども夫婦にとって、一九七三年のクリスマス早朝に天国に召された息子ダビデ武文と固く結びついています。日曜学校に行くのが何よりの楽しみで、ハナミズキの木の下でイエス様のお話を聞き、そして私ども家族をイエス様のもとに導いてくれたのです。この武文の思い出も、「花水木の由来」再版の動機となっております（尚、

故細貝岩夫司祭が「たけふみちゃんの十字架」という小冊子を残してくださっています)。

長坂聖マリヤ教会のハナミズキは今もその季節には豊かな花を咲かせ、秋は美しい紅葉と赤い実で神様を賛美しています。しかし、ハナミズキの生育を適切に管理していくことはなかなか大変なことです。アメリカシロヒトリが付いて消毒に苦勞したこともありました。どうか、私どもの愛する長坂聖マリヤ教会の庭に根付いた由緒あるハナミズキが、みんなの協力によっていつまでも、いつまでもその姿を失われないでいて欲しい、心からそう願い祈ってやみません。主に感謝。

二〇〇九年四月一二日 イースターの日に

パウロ 前島 毅

【付記】

一九八〇年（年表参照）、横浜教区、中部教区の諸教会及び施設に運ばれ移植された白倉昇進さん実生の苗は、約三〇年を経た今、各地でどのような成長ぶりであろうか・・・。

二〇〇八年一〇月の紅葉、二〇〇九年四月の花盛りを撮影された名古屋の一姉妹の詳細な報告によれば、何処もそれはそれは見事である。又、神奈川県、千葉県、長野県（小布施）のも同様、すべて各地にしっかりと根付いているのがよく分かった。

ハナミズキよ、

主をたたえ、

世々にほめ歌え

二〇〇九年六月

アブラハム 植松 従爾

ハナミズキの苗作りについて

前島 毅

白倉さんの跡継ぎとして、教会に植えるハナミズキの苗を育て始めたものの、発芽してくる実生(みしょう)の苗からは欲しいと思った赤い花がなかなか咲きませんでした。接ぎ木を試みて念願の赤い花を咲かせることに成功し、うち五本をはじめて教会の庭に植えました。その経験から、ハナミズキの苗の接ぎ木のやり方を書き留めてみました。

秋に赤くなったハナミズキの実を取り、表面に発根抑制剤が付いていたら、そのぬるぬるがよくとれるまで洗い落とし、専用のポットに蒔きます。

一～二年は間引きしながら育てます。ある程度の太さの幹になったら、それを台木にします。種から蒔くと、どんな色の花の木でも先祖帰りといってみんな白い花を咲かせてしまいます。

次に接ぎ木のための穂木作りです。接ぎ木する前年の秋、葉が落ちた望みの色の花木の枝を三〇cmくらいに切り取り、これを束にして穂木を作ります。穂木は横にして深さ一〇cm程の土の中に埋めて一冬寝かせておきます。これを翌年の四月に掘り上げて接ぎ木の作業を始めます。

台木を斜め四五度に切ります。大事なことは、この時使う切り出しナイフなどの刃先をよく研いでおくことです。これが、この作業の中で一番重要なことです。

穂木は芽を三つほど残して斜め四五度に切り、接ぎ木にします。その穂木の根本の形成層のところを縦に長さ二cm程切ります。台木も同じように縦に切り、両方の形成層を合わせテープでしっかりと巻き付けておきます。それを二〇cm間隔で畝に植えておきます。

そして、接ぎ木が成功して望んだ花が咲いたら、葉が落ち芽が吹くまでの季節の間に、苗木を庭に植え付けます。

長坂聖マリヤ教会 ハナミズキの由来 (年表)

◆1962 (昭和37) 年6月6日 日本聖公会横浜教区長坂聖マリヤ教会聖堂、聖別される。

◆1963 (昭和38) 年4月 花水木の苗木が約1000本ほど清里農村センター(KEEP)へ送られて来た。それはポール・ラッシュ氏の友人であるアメリカ北カロライナ州トライオンに住むサラ・ダーナル夫人のご好意によるもので、清里農業学校の開校記念としてそのガーデンクラブより寄贈されたものである。

苗木は早速農業学校生及び職員によってKEEPの敷地内各所(キープの踏切から清泉寮に至る道路脇、教会、農場各施設の周囲)に植えられた。同時にその前年創立されたばかりの長坂聖マリヤ教会の境内にも植えられた。

ところが清里の地は苗にとって気温が低すぎたためか、懸命の手入れにも拘わらず一本も育たなかった。皆どんなにがっかりされたことか…。

その一方、清里よりやや温暖な長坂に植えられた苗はしっかりと根付き、順調に伸び、数年後には綺麗な花を咲かせるまでに成長した。

50本近いハナミズキは毎年5月の初めから白・ピンク・赤と色とりどりに開花し、年々木も花も大きくなってゆき、SS(日曜学校)の子供たちが聖マリヤ教会の境内を駆け回る光景は絵のようであった。

当初、一般には「ハナミズキ」の名は殆ど知られておらず、「桜の終わる頃から咲き出し、長く楽しませてくれる美しい花木」として、珍しがられた。

◆1974 (昭和49) 年11月3日 白倉昇進さんと4人のお孫さん達でハナミズキの紅い実を採取。22,000粒を一週間日乾しし、種子を貯蔵。

◆1975 (昭和50) 年3月15日 白倉さんの水田の一部に播種。20日くらいで発芽。(その後数年に亘る精根尽くしての世話は、遂に実生から何千本かの苗を作り出すことに成功。)

◆1976 (昭和51) 年10月20日 「花水木の由来」小冊子を白倉昇進さん発行。

◆1976 (昭和51) 年11月 長坂聖マリヤ教会の初代牧師植松従爾司祭は中部教区主教として名古屋へ移る。

◆1979 (昭和54) 年 白倉さんの畝で実生から育ったハナミズキが初めて開花。白い花が多い。

◆1979 (昭和54) 年12月12日 ポール・ラッシュ氏永眠

◆1980 (昭和55) 年4月 白倉さんの育てた苗木は、清里、長坂の有志の手で一本一本丁寧に抜かれ、横浜教区の諸教会へ配ることになった。それは白倉さんが「花水木は教会の木だ」と終始言い続けられ、教会に捧げることをいたく望んでおられたからである。

そこで、清里聖アンデレ教会牧師 武藤六治司祭と、長坂聖マリヤ教会牧師 高田眞司祭との二人がレンタカー（トラック）に積んで、神奈川県は横浜聖アンデレ、山手、鎌倉、小田原、藤沢、平塚、大磯、林間バルナバ、こどもの園（茅ヶ崎）へ、千葉県は市川聖マリア、千葉、八日市場、茂原、銚子の諸教会へ。そして更に植松従爾主教の住む名古屋主教館、名古屋聖マタイ、聖ヨハネの諸教会、柳城学院及び愛知国際病院(AHI)へも配られたのである。この運搬の御苦労は大変なものであった。

この機会にも、清里聖アンデレ教会聖堂の周囲に苗木を植えてみたがやはり根付くことなく、育つことは無理な願いであった。一方、長坂に追加して植えた苗は成長している。その他に長野県小布施町新生病院及び新生礼拝堂の庭にも苗は植えられた。

◆1981（昭和56）年2月3日 白倉昇進さん 永眠

◆1982（昭和57）年 白倉さんの跡継ぎをと、前島毅が実生の苗を育てる。境内の多色の種子で育てるがやはり白花ばかりで、先祖帰りの現象と解る。「白が多すぎる。何とかして赤の花が欲しい」と、切実な思いがあった。

◆1985（昭和60）年 この頃から山梨県下の3教会（甲府、長坂、清里）合同のお花見会始まる。

◆1989（平成1）年 前島毅、ハナミズキの台木に赤花の枝を入手して接木を試み、10本成功する。（接木成功の体験は別に付記）

◆1993（平成5）年 赤花ハナミズキを教会の庭に5本植える。

◆1998（平成10）年12月19日 前島毅 頭部外傷。以後ハナミズキの手入れ出来なくなった。

◆2005（平成17）年 教会の会館、牧師館を新築。

◆2009（平成21）年4月12日 復活日現在、教会の庭のハナミズキは50本ある。